

久保田文次著

孫文・辛亥革命と日本人

櫻井良樹

一

昨年（本稿が出版される頃には一昨年となっているであろう）は、辛亥革命百周年にあたる年であった。本書をまとめられた久保田文次先生も、東京と神戸で行われた辛亥革命百周年日本会議によるシンポジウムの実行委員の中心（副委員長）として、計畫・準備・実行萬般にわたり八面六臂の活躍をなされた。

「グローバルヒストリーの中の辛亥革命」という包括タイトルでなされた東京會議のしめくくりの報告は久保田先生が擔當された（辛亥革命百周年記念論集編集委員會編『総合研究 辛亥革命』岩波書店、二〇一二年）。その中で先生は、一九八一（昭和五六）年の七十周年シンポジウムから十年毎に日本で行われてきた學會・シンポジウムのたどってきた道を振り返って、一九八一年のシンポジウムは、オーソドックスな政治史以外にも經濟史・國際關係・思想史にも目配りをきかせ、地域的にもベトナムやモンゴルも取り上げているなど進んだものであったが、臺灣の學者の参加が政治問題から不可能であったことや、開催にあたって文

化大革命の評価をめぐる對立などが影響を及ぼしたようなことがあったことを回顧している。今回のシンポジウムでは、それが社會史的・文化史的テーマに關心が廣がり、地方・周邊からの發想も目立っていたこと、かつての辛亥革命研究が「孫文正統史觀」、革命派中心史觀で進められてきたものが、世界史との關連や舊體制との連續性、北洋政府側からの視點など、複眼的なものに變化していることなどを指摘した上で、成功であったと述べている。

本書は、まさにこのシンポジウムが行われた、その月に出版されたもので、長く辛亥革命を主題に研究を積み重ねて來られた著者の研究の歩みを示す業績である。本書は八〇〇頁に達しようかという大著であり、また評者である私が中國近代史・革命史を専門とするものではないため、一つ一つの章について詳しく言及して、その當否を論じることがせずに、適宜、本文に及んで感想めいた書評としたい。ただし最低限のつとめは、内容を示すことであるので、部章のみをまず以下に示しておく（括弧内は發表年）。

第一部 辛亥革命と孫文

第一章 近代中國における孫文（二〇〇〇）

第二章 辛亥革命の理論と實際（一九七八）

第三章 辛亥革命と帝國主義（一九七八）

第四章 孫文の平均地權論（一九八〇）

第五章 辛亥革命と孫文・宋教仁（一九七四）

第二部 世界史における辛亥革命

第一章 世界史における辛亥革命（一九九二）

第二章 世界史の中で辛亥革命を考える（一九九五）

第三部 孫文と日本

第一章 孫文の對日觀（一九八五）

第二章 『支那革命外史』の實證的批判（一九七三）

第三章 孫文と「滿洲租借交渉」・「日中盟約案」再考（二〇〇〇）

三）

第四章 一九二四年、孫文・頭山滿會談再考（新稿）

第四部 孫文の日本人同志

第一章 萱野長知の基礎的研究（一九九六）

第二章 『革命評論』廢刊後の萱野長知（二〇〇〇）

第三章 萱野長知の中國觀（一九九九）

第四章 『萱野長知・孫文關係史料集』からみた新事實（二〇〇一）

〇一）

第五章 『中華民國革命秘笈』の研究（二〇〇二）

第六章 梅屋庄吉の基礎的研究（一九九九・二〇〇五）

第七章 孫文・梅屋庄吉とインド革命家の交流（二〇〇五）

第八章 樋口一葉を哀悼した中國革命家陳少白（二〇〇六）

第九章 孫文と大月薫・宮川富美子（二〇〇九）

第五部 雜錄

一 日本における辛亥革命遺跡めぐり（一九八二）

二 中國同盟會發祥の地に關する考察（新稿）

三 劉大年先生とともに（一九八〇）

四 辛亥革命七〇周年訪中記（一九八二）

五 孫中山研究國際學術討論會參加記（一九八七）

六 劉大年先生を偲んで（二〇〇〇）

七 田中先生と話したこと（二〇〇三）

八 中村義さんを偲んで（二〇〇八）

こう書きあげるだけで、もう一頁も費やしただろうか。

二

評者は、この分厚い本を前にして、どこから讀むか悩んだあげく、著者が「まえがき」や「あとがき」で、本書に収めた論文のことを「時代遅れ」になっているものがあると記し、しきりに自分の研究史を回顧されているので、發表年代順に讀むことにした。もちろん發表年順であって、執筆順ではないので、正確には著者の研究の歩みを理解できたわけではないが、そうすることによって本書の意圖は理解できたように思った。蛇足かも知れないが、著者は古い論説を本書に収めるにあたって、補記を付けて、誤りを正したり、その後の研究動向について補足したり、執筆當時の問題意識を記したりしている。これは執筆後、その問題について研究動向を常に把握していないとできないことであって、實は簡單であるようで、なかなか難しいことである。

さて著者が「時代遅れ」だとする論説は、補記などを参照にすれば、一九八〇年に發表されたもので、たぶん一九七〇年代に執筆されたもので、多くは「第一部 辛亥革命と孫文」に含まれる（第一章 近代中國における孫文）を除く）ようである。ただし最も古い一九七三年發表の第三部第二章『支那革命外史』の實證的批判」には、「若氣の至り」や「時代遅れ」「居直り」を表すような補記はなされていない。

この章（第三部第二章）を書いたいきさつについて著者は、もともと自分は四川省の社會經濟史が研究對象であった（最初の論

文は「辛亥革命と四川省」一九六九年というが、その前に「清代東トルキスタン農業問題に關する一私見」『史潮』七一號、一九六〇年や、「清末四川の大佃戸」『近代中國農村社會史研究』大安一九六七年のような業績もある）ので、辛亥革命や孫文については他の人の文献を讀むだけで専門的に研究したわけではない、ただ興味に任せて『支那革命外史』は北一輝の文體が好きで何回も讀んでいたが、ある時に孫文と宋教仁に對する北の評價に違和感を覺えたことが、辛亥革命研究の發端になったと述べている（「まえがき」）。北が、孫よりも宋の方に高い評價を與え、また學界でも孫についての評價が低かったということである。當時の學界での低い評價は、社會主義革命という觀點からすると、孫文が行ったことはブルジョア的と見なされていたからである。

この章において著者は、北が孫文批判をするにあたって、孫の民主共和思想をアメリカ的とみなし、また外國の援助を仰いだことを妥協的で不徹底なものとしたことが、ブルジョア的だとする當時の學界の潮流に合っていたとした上で、そのような批判は當たっていないとする。孫文の本來の理想の一つである「民生主義」は社會主義的なものであり、歐米的な革命をめざしたものであること、そして現實的には段階を踏んで政治改革を實現しようとしていたこと、外力依存（つまり反帝國主義が徹底しなかったこと）については、孫文も原則としてそれを避けていたことを指摘し、北も日本の援助を畫策し日本の國權的侵略をめざしたものであり、孫を批判する資格のないことを指摘している。

この點については、前の章「孫文の對日觀」（一九八五年發表）で、もう少し詳しく述べられている。外力依存、特に革命援助と

引き換えに中國主權の一部を犠牲にしようとした對日依存の孫文の態度について、日本の帝國主義的中國侵略の危険を知りつつ、實用主義的な戰略・戰術として行われたものであり、具體的に英露に對抗する利害・關心を持つ國が日本のみであり、まだ大正初期にあつては日本の本格的な中國侵略は困難であると考え、中國革命成功の方を先に實現しようとしていたとしている。辛亥革命の早期終結がめざされ、袁世凱との妥協がなされたのは、列強からの干渉を回避するためであり、孫文の現實的な對應であつたとするのである。

たぶん次の第二部第三章と重なる部分が多いために本書には掲載されていないが、著者には「孫文のいわゆる『滿蒙讓與論』について」（中嶋敏先生古稀記念東洋史論集 下巻）汲古書院、一九八一年）という論文があり、本章（第二部第一章）はもともと、これと對になつていた論文ではなからうか。その代わり本書に收められた第二部第三章「孫文と『滿州租借交渉』・『日中盟約案』再考」は、この章の主役の半分が日本側であるという點で、それまでの一貫して孫文を中心とする章の視角とは異なる。もちろん孫文にかかわる問題を扱つたのであるが、結論は日本側では滿洲租借案など最初から本氣で熟議されなかつたという日本側の事情を示し、孫文もその時には滿蒙保全論に立つていたことが添えられている。ではなぜそのような交渉が森格を通じてなされ、それが歴史的にどういう意味を持ったのだろうか。それについては、森にとつては今後の革命派との關係を作る上において、革命派にあつては從來から革命に冷淡であつた日本の上層部が多少なりとも援助の手をさしのべる可能性があることを認識した點で有意義

であったということが指摘されている。

ついでに新稿である第二部第四章「一九二四年、孫文・頭山滿會談再考」に言及しておく。これは、すでに日本からの援助を引き出す路線に「見切りをつけた」はずの孫文が、神戸において大アジア主義演説を行い、日本との提携・親善を高唱した理由を探ったものである。當時の中國を取り巻く國際情勢や内戦状況、日本の社會状況などをふまえて、その現實的意圖が、租借地返還交渉ではなく關稅自主權と治外法權の撤廢をめざした世論喚起にあること、そのような文脈から頭山滿との會談での孫文の發言は理解されなければならないことを述べたものである。

さて北一輝を導入とする孫文評價の見直しの章は、アジア主義研究が格段に進んだ今日からすれば、北一輝に革命のロマンを感じていた時代的雰圍氣を十分に見て取ることができる論考である。それを「時代遅れ」だという補記をされなかつたところに、本書の後半部につながっていく著者の問題意識の潜在性と繼續性を見出すことができる。

三

第一部第二章から第五章は、すべて辛亥革命そのものに關する論文であり、著者が「時代物」「時代遅れ」の部分があると述べられている部分である。ではこの場合の「時代」とは、どのようなことを言うのだろうか。それにもかかわらず「今でも通用する部分がある」と言うのは、どのあたりだろうか。「時代物」というのは、悪く言えば古色蒼然ということになるのだが、別言すれば傳統的な型に基づいているということにも表現できる。この部

分は、議論の枠組が前面に出ている点でそうなのだが、その中で新味が味わえる部分なのだ。

枠とか型は、具體的にはこうだ。第一部で最も發表の早い第五章「辛亥革命と孫文・宋教仁」の枠は、孫と宋とではどちらが「より革命的か」ということを、社會主義革命に近い方を高く評價する観点から見る見方であり、その議論の一端は先の北一輝を論じた章でも展開されている。第二章「辛亥革命の理論と實際」は、著者自ら「半植民地・半封建社會論」にもとづいて執筆したと補記しているが、「帝國主義による侵略に對抗できなかった中國社會の前近代性の殘存」を前提に論じたと言った方が正確か。

第三章「辛亥革命と帝國主義」も同様だが、「帝國主義に對する民族的抵抗」という観点から考えるところなるか、ということになろう。そして第四章「孫文の平均地權論」は、これも著者の補記によれば「農民的土地所有の實現」だが、「革命における土地所有形態のあり方」についての主張を基準にして先進性を測るものであろう。ただしこれらの枠組みは嚴格に適用されるのではなくて、それぞれの論考の中で、現實的な観点から適用されていることに留意しなければならぬ。それがこれらの論考の新味となっている。

第五章では、革命勃發から中國同盟會解散・國民黨結成に至る黨内抗争のなかで、孫文の社會主義理念である民生主義が削られてしまったこと、そして孫文も戰術的には議會政黨の黨首としてふるまわざるをえなかつたことが指摘され、むしろブルジョア民主主義者が宋であり、孫の方が革命の終局點を見据えて行動していたとされる。第二章・第三章では、辛亥革命が帝國主義列強の

歴迫の前に失敗に終わったということを前提にしながらも、中國民族の抵抗が列強による干渉を押しとどめる側面があったこと、それを知った孫文は革命に望みをつなぎ、ちょうど同じようなことを考えていた宮崎滔天との共感から、反歐米・アジア連帯という路線を取り、孫文には、何度も述べられているように日本帝國主義を輕視する面はあったが、長期的には、やがて列強の競争などから「世界革命」が起り、さらにそれが「社會革命」の勃發につながるであろうと考えていた、このようなものが孫文の反帝國主義的の革命思想であるとした。第四章では、孫文の平均地權論の主張がブルジョア的に見えても、地價上昇分を國家に吸収して、それを財源として地主所有地を買収し、最終的には土地國有論に行き着くという考え方が一貫して維持されており、決して平均地權論の意義は低くないものとした。これらの論説に見えるように、理想論と現實論との對立は、いつの世にもあるものだが、著者はあくまでも同時代における現實政治の觀點から孫文を論じ、あるいは論じようとし、その上で孫文の理想と限界點を見極め評價しようとしているのである。

この第一部には比較的新しく發表した(二〇〇〇年)「近代中國における孫文」が收められている。そこでは中國大陸において改革・開放經濟政策が始まるとともに、孫文に對する見方が變化し、辛亥革命の評價が高くなり、まさに孫文が主張していたことが實現し始めるようになったことが挙げられている。これは長期的に見た孫文理想の實現であるということになる。また孫文の言うことにはいたるところで矛盾があり、いくつもの處方箋を持っていた人物だと思ふようになった、孫文は「中國人の目を見開

かせた」人物であると理解したいという著者の現在の孫文觀が示されている。

四

第二部「世界史における辛亥革命」の論文も、しっかりとした議論の枠組のもとで書かれたものである。しかし著者は、「時代遅れ」だとは書いていない。ここに收められた二つの論文は、ともに世界史上における辛亥革命の位置を論じたものである。その枠組は、「辛亥革命はブルジョア革命なのか否か」という、これはけつこう昔からある議論の枠組みである。發表された年は、一九九二年と一九九五年。辛亥革命とフランス革命・イギリス革命との對比がなされ、ともに従來の日本の議論では歐米の革命を理想化してきた傾向のあることが指摘され、フランス・イギリス兩革命史研究の最新成果に照らして、辛亥革命をブルジョア革命と言つてよいとしている。日本においてかつて「明治維新はブルジョア革命か否か」という議論があったが、それを髣髴させる議論である。本書にはまったく出てこないが、先生は、かなりヨーロッパの事情に通じておられ、英語の書物を多く読んでいらつしやる。決して東洋學オンリーではない。どの時期に、その方面に力を入れたのかはよくわからないが、その影響で、世界史的な視野から論じるという方向性が強くなったのであろう。

一九八〇年代は、著者に、もう一つの變化があった時期のようである。著者は、「まえがき」で一九八〇年代に義和團發生地域の調査に加わり中國の現地を體驗して、それまでの中國理解の淺薄さを自覺したと書いておられる。また第五部の雜録の中で、一

九七九年に劉大年先生を案内して日本における孫文ゆかりの地をめぐったことが、日本にある辛亥革命・孫文史料・史蹟研究の端緒だったと書いている。その時の成果が「日本における辛亥革命遺跡めぐり」である。評者にとつては、そういう話は、その都度ニュースなどで聞いたことがあったような記憶があり、それが初めて確認されたということ知らなかったので不思議だった。しかし昨年出版された羅福惠・朱英主編『辛亥革命百年記憶與詮釋』第四卷の陳蘊茜等著『紀念空聞與辛亥革命百年記憶』（華中師範大學出版社、二〇一一年）には「海外辛亥革命紀念空聞」として一章が設けられており、日本における孫文・辛亥革命關係の地も網羅的に紹介されている。その註を見ると、たしかに劉大年や著者の名で出された文献が見える。確かにそうなのだ。著者の研究の方向の變化には、このような人物に對する關心がより前面に出てきたことがあげられる。

第四部「孫文の日本人同志」では、孫文を援助したこと有名な萱野長知と梅屋庄吉のことが複数の章でとりあげられ、さらに二つの章ではインドの革命家や樋口一葉にも話が及んでいる。これらは比較的最近書かれたもので、多くは孫文關係の新史料發掘と資料集などの公刊に關連して書かれたものである。分量的には多く合計で二八〇頁にも及ぶ。一冊の本になるくらいだ。第一章から第五章では萱野長知について、崎村義郎『萱野長知研究』を補う形で、萱野の紹介、中國革命とのかかわり、日本における『革命評論』との關係、その中國觀、日本政府の政策への批判などについての史實の確定、および萱野の著書である『中華民國革命秘笈』の紹介と、現在の觀點から見ての意義と批判などがなさ

れている。なお第四章は萱野に關係するように思われるが、『萱野長知・孫文關係史料集』に收められた孫文關係史料についての解説であり、萱野の手によって残されたものではあるが、直接萱野に言及するものではない。アメリカ人と孫文の關係がわかるような史料が紹介されており興味深い。

第六章と第七章は梅屋庄吉に關するものである。第六章では梅屋關係史料の紹介とともに、それを利用して車田讓治『國父孫文と梅屋庄吉』の著述に誤りが散見されること、またその著述の主たる資料であった「永代日記」（これは「梅屋日記」をもとにしたもの）について考察したもので、信憑性はあるが氣をつけるべきことを記している。これに對して第七章は、梅屋についての研究ではなく、梅屋史料のなかに残されていたアルバムに寫っていたインド革命家に關する傳記的研究で、バルカトウツラー、バクワーン・シン、ラス・ビハリ・ボース、波多野春房を扱い、孫文との關係にも觸れる。こうして著者の關心は、日本から他のアジアへ擴大していく。

そして第八章「樋口一葉を哀悼した中國革命家陳少白」は、副島八十六の残した史料に、中國革命家陳少白と樋口一葉の接點を示す史料があったことを手がかりに、片山潛や孫文をも絡めながら、樋口研究に新しい事實を加えたものである。副島史料という新たな孫文關係史料紹介のさわりであろう。最後の第九章は孫文の日本人妻であった大月薫と、その遺兒である宮川富美子について、その事實が判明してきた経過を、著者とのかわりを織り交ぜながら説明したものである。一九八四年新聞報道で発表したことで話題になったが、その時には明らかにできなかったこと、公

表を憚ったものがあつたため、それを二十五年後に補うことになつたものであり、著者の遺族に對する慎重な配慮を窺うことのできるものである。

五

結局すべての章をひとつずつ紹介するようになったが、最後にいくつか感想めいたことを記しておきたい。雑録の詳細などについても記したのは、評者が一番感銘を受けたのが、この雑録と第四部第九章の孫文の日本での遺児をめぐつての文章であつた。なぜかという、たとえば最後の中村義生先生への追悼文には、無理をされて参加された宇都宮太郎研究会終了後の會場で、横になつて休憩されながらも歴史研究のあり方についてメッセージを託された中村先生の姿が記されている。その場にはいたので、共感するのは當然なのだが、中村先生のように日中關係にかかわつた先人たちの行動を、どんな小さなことでも良いから書き残してこつ、後世に伝え、二〇世紀中盤の不幸のようなことが二度と起こらないようにしたいという思いが傳わってくる。それぞれの短文が、あるいは細かな事實の發掘の成果（たとえば日本における辛亥革命ゆかりの地の紹介）であつたり、日中學術交流のゆるやかな發展（訪中記）や、そのためになされた地道な努力を示すもの（劉大年先生にかかわる二つのもの）であつたりするのだが、これらの部分には著者の行つてきた研究活動の問題關心が、もつともよく表わされていると思へ、本書の主題を端的に表しているからだ。主題は、歴史の、得てして評價のともないやすい史實の位置づけを、あくまでも歴史的興件の中で確定していくことが歴

史研究の使命であるということである。

そもそも本書が扱っているのは何かというと、それはもちろん孫文であつたり、辛亥革命であつたり、それに關與（援助したという側面が強い）日本人である。しかしたとえば孫文に對する著者のスタンスは、「辛亥革命七〇周年訪中記」で端的に指摘されているように、孫文の神格化・絶對化を避け、むしろ彼を規制してきた歴史的興件を重視して分析することで、その上で成し遂げたことを評價し位置づけるといふ姿勢が強い。それが結局は、孫文個人に對する高い評價になるのだが。これは孫文に限らず、日本人についても同じである。これを示すことが、この浩瀚な書物のメインテーマである。著者の「歴史研究のあるべき姿」が、歴史研究論としてではなく、實證における實踐で示されている書物である。

久保田先生は、すでに大學教授を卒業されていらつしやる。往々にして、そのような先生が定年間近になつてまとめられた本の中には、その刊行意義を疑わせるようなものがある。ただ単に昔に書いたものをまとめて讀みやすいようにしておくか、記念作品のようなものである。本書にも、四〇年近く前に發表されたものはあり、文體（というより使われている歴史的用語と書き方のスタイル）がいつけん古めかしいところもあるが、そこで述べられていることで、現在でも意味がありそうなものを見極めて編集がなされている。著者の孫文・革命研究で収録されなかつたものは、この他に多數ある。一九八〇年代のものは多くとりあげられていない。重ならないような配慮はあつたかと思われるが、その選擇がどのようになされたのかは必ずしも明確ではない。著者の

問題關心は、もっと廣く、本書のテーマ以外にも業績は及んでい
る。例えば「近代國家における政軍關係の展開」(一)(二)、『日
本女子大學文學部紀要』三八號・三九號、一九八九・一九九〇
年)という論説がある。これは統帥權のあり方を、世界的視野で
論じたもので、未完のままになっている。何回か直接申し上げた
こともあるが、完結させてほしいものである。

評者が歴史研究を本格的に始めたころ、自分の専門とする近代
日本史分野にもまして、中國史の分野はとてども理屈っぽいと感じ
て敬遠していたものである。しかしこの本を通讀して、著者の言
う「時代遅れ」の部分の方が面白く讀めた。使っている語句は古
めかしいところもあるのだが、内容的にはそれほど古臭くないと
感じたのである。枠組を明確にして議論をしていた時代のなつか
しさと、その枠が崩れていくおもしろさを感じたのであろう。こ
れに對して後の方は、新しく示される事實は貴重なのだが、世界
觀が變わるというような面白さはない。もしかしたら役者が小物
なのかもしれない。時代劇は古くさくとも、役者が孫文のような
大物であれば面白いが、小物の演じる新しいものは平凡だという

こともかもしれない。

最後に、帝國主義論の枠組から、帝國主義諸國が清國・袁世凱
を應援したことにより、革命派援助が無批判に正當化される傾向
が研究史的にあるということがわかった。そこから生じる現象で
あるが、日本人のアジア主義者の行動評價が甘くなる。もちろん
アジア主義の帝國主義的側面がもつ問題點は、ちゃんと指摘され
ている。本書の主題はアジア主義では無く、孫文が主人公だ。し
たがって孫文の歐米への反帝國主義的側面を重視すれば、自然に、
彼を援助した日本人たち、本書で取りあげている菅野や梅屋はそ
うではないというところに取りあげた意味はあるのだが、また宮
崎滔天のような例外もあるのだが、その回りにいた、いわゆる大
陸浪人たちへの評價が脱落してしまう危険性がある。そんな感じ
がした。

A5判 平成二十三年二月 汲古書院
本文七三五・四五頁 二萬圓